

三具 淳子 著

『妻の就労で夫婦関係はいかに変化するのか』

（ミネルヴァ書房、2018年 248頁）

鈴木 富美子



平均寿命の伸びによって結婚生活が長期化する中、夫と妻の関係はどのような変遷をたどるのだろうか。本書はこの問題に対し、夫婦関係—とくに夫婦の平等な関係—の醸成に大きく関わる妻の就業状況に着目し、権力関係、時間軸、ジェンダーという3つの分析視点から解明を試みている。

夫婦は夫と妻の閉じられた関係の中で生きているわけではない。それぞれの社会的な役割を担った妻・夫として、毎日の暮らしの中で、さまざまなやりとりを経験しながら相対峙している。そうであれば、本書が分析で用いた3つの分析視点は、ミクロレベルの夫婦関係と、その夫婦がおかれるマクロレベルの社会関係をつなぐという意味で、現代の夫婦関係研究には不可欠な要素である。これらの要素を手がかりに、重層的に絡まりあった複雑な夫婦関係を解きほぐし、夫婦のリアリティに迫ろうと試みた書である。

まず各章の概要から紹介していこう。序章では、妻の就業行動に着目する3つの意義が示される。①夫婦の平等化の問題に対し、これまでほとんどテーマ化されてこなかった女性側の役割シフト（生産労働への参入）の方向から論じること、②妻の就業をめぐる夫婦間の相互行為への着目は、社会におけるアンバランスなジェンダー・アレンジメントの形成メカニズムの解明につながることで、③「近代家族」の抱える矛盾—夫婦の対等な関係を基本としながら、性別分業がもたらす従属関係を前提に成立・継続—に対峙すること、である。第1章では、戦後の家族研究の大きな流れを整理し、近代家族論の影響力の大きさにもかかわらず、そこに内包された矛盾に関する議論が不十分であり、夫婦関係の平等化に関する研究に偏りがあることを述べる。第2章では、1990年代以降の既婚女性の就業を特徴付ける要素を示し、従来の夫婦関係研究のもつ限界を乗り越え、現代の夫婦関係を捉えるための分析視点として、冒頭に示した3つの分析視点の必要性を主張する。

第3章から第7章は分析編である。第3章では、欧米での「経済的依存」に関する研究動向を紹介し、日本における夫婦の経済的依存度を量的データから算出する。1990年代以降の既婚女性の就業率の増加は夫婦間における女性の経済的依存度の低下につながっておらず、その背景にある労働時間の短さと低賃金の問題を指摘する。第4章では、「個人の経済的な自立」と「夫婦の対等な関係」について、首都圏在住の女性を対象とした大規模な量的調査データから分析する。但し、横断的データでは夫婦関係のありようと実際の働き方の因果関係や相互作用については明らかにできないことから、以下の章では、同一夫婦の時間的変化に着目した縦断的視点を取り入れる。第5章の調査対象は、第1子の出産を間近に控えた夫婦23組である。共働き時代には夫との関連を「フィフティ・フィフティ」であると認識していたにもかかわらず、なぜ出産を機に「性役割に従った夫婦」に変化していくのか、そのプロセスをKomterの3つの権力作用—顕在的権力、潜在的権力、目に見えない権力—を参考に解明を試みる。第6章と第7章では離職した妻のその後をライフストーリーの手法を用いて追っていく。調査対象は30代前半から60代

前半の女性 25 名である。筆者は、この幅広い年齢層の女性たちを、「共働き⇒専業主婦⇒再就職」という同じ出来事の経験をもつという状況の共通性に着目し、ひとつの「状況のカテゴリー」として扱う。離職後の専業主婦経験を妻はどのように経験し、夫婦の関係はどのように変化しているのか（第 6 章）、さらにその後、妻がパートやアルバイトなど何らかのかたちで再び職業に就くことによって夫婦の関係がどのように変わっていくのかを描き（第 7 章）、終章では、これらの実証研究で得た知見をまとめ、現代の夫婦が直面している問題を指摘する。

筆者が妻の就業にこだわるのは、「対等な関係性は、何の根拠もなく宙に浮かんでいるものではなく、資源に裏打ちされた個人の自立が実現されてはじめて可能になる」（p174～75）と考えるからである。但し、当事者である妻たちがこのことに気づくのは、職を失ってからである。これを著者は「気づきの不幸」と呼ぶ。なぜ「不幸」なのかといえ、子どもを育てながら仕事を続けるための社会的状況は整備されていない（＝職につくことは難しい）が、夫との対等ではない関係性を受け入れることもできず、妻たちは進退きわまるからである。こうした妻たちの姿、さらには、そこから脱するために「もがく」姿を著者はフェミニスト・エスノグラフィという手法で掬い取る。これは、男性の研究者や男性のインフォーマントからは「取るに足らない」と見落とされてきた女性の生活と活動を記録し、女性の視点から女性の経験を理解し、女性の行動を社会的コンテクストから読み解くことを目標とするものである（春日 1997）。「近代家族」のもつ矛盾を抱えながら「共働き⇒専業主婦⇒再就職」と就業状況を変化させていく女性たちに寄り添い、その声を拾い上げ、「止むに止まれぬ想いとその表現行動」（p223）を描き出す。

ここに描かれた妻たちの語りやそこからの知見に説得力があるのは、近代家族の抱える矛盾に「もがき」ながら、それでもなお「夫婦」という存在をあきらめることなく再編していくことへの妻たちの希求、そして何よりも、何とか夫婦のリアリティに迫りたいという筆者の切実な思いが本書を貫いているからだと考える。妻が求めているのが「夫との直接的な、場合によっては仕切りなおしをせまるような交渉」（p216）であるならば、夫は妻の声に真摯に耳を傾け、「当事者」として妻と向き合う必要があるだろう。と同時に、夫婦関係を二人だけの閉じられた関係にとどめず、その背後にある社会的コンテクストから読み解こうとする本書の姿勢は、「社会の中の夫婦」という視点を併せもつ。夫婦関係研究に興味をもつ人には得るところの多い一冊となろう。

参考文献

春日キスヨ, 1997, 「フェミニスト・エスノグラフィの方法」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『ジェンダーの社会学（岩波講座 現代社会学）』岩波書店, 169-187.

（すずき・ふみこ／東京大学社会科学研究所准教授）